

平成21年 5月28日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19820014
 研究課題名（和文） 現代インド地方都市の中間層女性における「理想の生き方」の模索
 研究課題名（英文） Middle Class Women's Search for an Ideal Way of Life in Regional Cities in Contemporary India
 研究代表者
 常田 夕美子（TOKITA YUMIKO）
 大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任助教
 研究者番号：30452444

研究成果の概要：本研究の成果は、インド地方都市における中間層女性の「理想の生き方」や「生きがい」についての考え方や価値観は、急速に変動する社会経済状況のなかで個々人によってそれぞれ独自に再検討され、自らがおかれている関係性のネットワークのありかたやそれまでの人生経験と密接にかかわっているのが明らかになったことである。グローバル化や近代化に対する希望を持つと同時に伝統的な宗教実践に新たな価値を見出す動きもみられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学/文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、女性学、民俗学、社会学、宗教学

1. 研究開始当初の背景

従来のインドの都市中間層の女性に関する社会学的研究は、より多くの女性が外で働き、高等教育を受けるようになったことに注目し、これにともなう核家族化などの居住パターンや家族構成の変化について論じてきた。それらの研究は、都市化による社会変化が近代的な個人・家族を生み出していることを前提としていたが、主にマクロレベルの統計資料を用い、個々の女性の視点を取り上げてこなかった。

個々の女性の視点や世界観を扱った人類学的研究は、インド大都市の中間層女性たちのセクシュアリティや宗教観に注目し、西

洋女性の身体や自己イメージに関する最近のフェミニズム理論を取り入れ、女性が近代特有の自己監視・規律を内在化していると論じている。そして、現代インド女性の個人的アイデンティティの構築も、西洋女性と同じような、匿名的で抽象的な「他者のまなざしの内在化」にもとづいており、ここには近代的個人の普遍的な特徴が見られると主張する。

私はこれまでインド・オリッサ州の村落と都市部（プリー及びブバネーシュワル）で、フィールドワークを6年あまりにわたって遂行した。その結果、近代的個人の成立を前提とした従来の理解は、インド地方都市に住

む中間層の女性にはあてはまらないことがわかった。彼女たちに影響を与えるのは、抽象的な自己監視・規律のまなざしではなく、コンテクストに応じた、周囲の具体的な他者たち（親、夫、義理の親、友人など）のまなざしである。現代インド地方都市の女性は、関係性のなかにおかれた身体＝パーソンとして、さまざまな状況や関係性に応じ、自己を可変的に統御できるメタレベルの身体技法が要求されている。それは、即興的かつ反照的に、その状況にふさわしい自己を構築し、適切なふるまいを自然に美しく為す「自己の美学」である。

本研究では、これまでの成果を踏まえ、現代インド女性の、自己の美学に引き続き注目すると同時に、個体にとっての経験、価値形成、自己実現のための行為主体性の諸側面に注意しながら、現代インド地方都市女性の理想の生き方の模索のありようについて考察を発展させたかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく変動する現代インド地方都市に住む女性にとっての「理想の生き方」とはなにか、また彼女たちは、自らの「生きがい」をどこに求め、その実現のためにいかなる選択と努力をしているのかについて明らかにすることであった。本研究では、地方都市の中間層という、社会変化の影響がもっとも著しい集団に属する女性を対象を限定し、そのなかでさまざまな世代の女性たちにとっての「豊かさ」、「理想の生活」、「あるべき人生」についての考え方およびその実践的な構築過程、またそこでの葛藤と模索について、組織的なインタビューと参与観察を通じて、網羅的かつ綿密に調査・分析した。現代インド中間層女性は、具体的な関係性のなかの身体＝パーソンとしての自己の位置づけを重要視しながら、同時に、マスメディアおよび親族・友人からの情報やトランスナショナルな経験をもとに、現代世界に生きる女性としての自己反照的な視点を獲得した「身体的かつ自省的なエージェント」(embodied and reflexive agent)として、自己にとっての理想の生き方を模索していると考えられる。その調査・分析においては、社会構造や価値体系ではなく、むしろ結節点としての個を中心として広がる関係性の束、また、個が接してきた情報や経験の積み重ねを通じた価値観の形成過程に注目した。こうした個からのアプローチは、近代化に伴う個人主義の成立を前提するものではない。むしろそれは、現代インド女性個々の存在が、いかなる新たな社会性・関係性のなかで、自己を(再)構築しているのかを明らかにすることを目指すものであり、生きる個体を軸としたネ

ットワークとエージェンシーの視点から、現代インド社会の動態を描写しようとする試みであった。

本研究は、現代インド地方都市の中間層女性が、具体的にどのような関係性のネットワークのなかにおかれているか、いかなる経験や情報が彼女たちの人生観に影響を与えているか、彼女たちがどのような人生を思い描き、いかなる実践的な選択をなしているか、を参与観察とインタビューを通じて明らかにすることを目的とした。そして、彼女たちの「理想の生き方」の模索のありかたを、重要な他者への配慮のなかでの自己構築、および、現代社会で多様化するさまざまな経験と情報をふまえての自己反照の過程との関係において分析したかった。これを通じて、現代インド女性の置かれた社会的状況を、個的エージェントにとっての葛藤と逡巡と希望の緒相のなかで明らかにし、その逆光のなかで、インド社会における価値観と生活スタイルの変容過程の現実を描写することを目的にした。

3. 研究の方法

本研究は、日本での文献研究および現地でのフィールドワークを通じて行った。現地調査では、インド・オリッサの州都ブバネーシュワル市とプリー市在住の中間層女性、および、彼女たちと重要な関係を有する人びとへの、インテンシブなインタビューそして参与観察を行った。

ブバネーシュワルに加え、ブバネーシュワルから60キロほどはなれた聖地プリーを調査地として選んだのは、インタビューをしていくうちに、中間層女性の「理想の生き方」や「生きがい」についての考え方や価値観は、彼女たちの宗教的な実践と密接にかかわっていることが明らかになったからである。プリーはヒンドゥーの四大聖地のひとつであり、寺院や僧院が多く、人生の意味を問い、精神性を追求する人々が集まる場所である。と同時に、プリーはブバネーシュワルと同じく急速に変動する地方都市であり、そこに住む女性たちの奮闘・葛藤を調査するのも本研究のために大いに示唆的であった。

現地調査においては、ブバネーシュワル市およびプリー市の中間層女性から30人を選び、それぞれの女性をめぐる関係性のネットワークの具体的な詳細、および、彼女たちのライフヒストリーについて、できるだけ緻密な情報を獲得した。インタビューを通じて、彼女たちの「理想の生き方」と「生きがい」についての考え方や価値観および実際の人生経路と将来計画・希望について聞き取り、それが、彼女たちがおかれた関係性のネットワークのありかたやそれまでの人生経験と

どのように関わっているかを、考察した。インタビューはまず当該女性に対して行い、ついで、彼女と関係性を有する親族や友人などに対して行った。

インタビューにおいては、次のような同じ質問を誰に対しても行いながら、自然な流れにそって会話を進めていった。1) 今、一番欲しいものは何ですか？ 2) 今の生活に満足していますか？もし満足していないのなら、何が不足していますか？ 3) これから生活はよくなっていくと思いますか、それとも悪くなっていくと思いますか？ 4) あなたにとって「豊かさ」「生きがい」「理想の生活」とは何ですか？ 5) 「理想の生活」の実現のために、何かしていますか？ 6) あなたは、人生上の選択をするときに、どうやって決断してきましたか？ 7) あなたの人生に影響を与えた（与えている）人たちについて教えてください。 8) あなたの人生に影響を与えた出来事について教えてください。 9) あなたの人生に影響を与えた言葉、本、映画、音楽、絵画、彫刻、写真、テレビ番組、広告などについて教えてください。

こうした会話の流れのなかで、1) 未婚／既婚；2) 年齢；3) 所属カースト；4) 職業；5) 年取；6) 家族構成；7) 宗教などの個人データについても獲得した。

本研究を効率的に進めるために、インド・デリーのジャワハルラール・ネルー大学(JNU)の女性学研究センターの研究者と意見交換をした。また、ブバネシュワルの親しい女性たちとも、日本滞在中から電子メールなどで連絡をとりあって、調査研究のための前準備（インタビューに応じてくれそうな人からの承諾やスケジュール調整）を進めておいてもらった。

4. 研究成果

インド地方都市の中間層女性の「理想の生き方」や「生きがい」についての考え方や価値観は、彼女たちの宗教的な実践と密接にかかわっていると同時に、急速に変動する社会経済状況に対して様々な夢を抱いていることが明らかになった。

さらに女性たちは、関係性のなかで期待される自己の役割と、自分の思い描くあるべき都市女性像の姿とを調和的に接合させたところに、自己の「理想の生き方」を想像しつつ、現実のなかでは両者の葛藤に苦しみながら、何とか二つを架橋することを模索していることが明らかになった。また、親族・友人・仲間とのネットワークが、個体の理想追求にとって束縛や邪魔となっている場合と、むしろそのサポートになっている場合があり、その両者の違いは、関係性における相互尊重の度合いある。現代インド都市女性の生き方の

ひとつの可能性は、自己の生きるネットワークを広げつつ、そこで形成される新たな関係性をより互惠的なものに高め、その関係性の豊かさ自体を自己向上と結びつけることにあると考えられる。

本研究においては、インド女性を、従来のように社会構造・価値体系に埋め込まれた存在であるとか、近代化のなかで自己監視・規律を内在化した個人であるとかみなすのではなく、むしろ、関係性のなかで自己構築をしつつ、同時に、個体として自己実現をめざすエージェントとしてとらえた。こうした視角を採用することで、現代インド都市女性にとっての、状況に応じた自己の美学の文化的重要性とともに、現代グローバル社会における個体の自己反照性という近代普遍的な側面を、双方ともに視野に入れることが可能になった。

また本研究は、社会・文化的条件がいかに女性の位置づけや役割を決定しているかという、従来の一方向的な問題設定とは異なり、個を中心としたネットワークとそこにおける行為主体性の性質に注目することにより、個人的なるものと社会的なるものがいかなる相互規定的で相互作用的な関係をなしているのかという問題設定をした。これを通じて、現代インド都市中間層女性の生き方がいかなる関係性において構築されているか、そして、女性が理想の生活を追求するにあたって、どのような関係性のネットワークが、いかなる助けあるいは束縛となるのか、そして都市女性が新たな生活スタイルと関係性を追求するエージェンシーは、現代インドの社会変容といかに関連しているのかという、新たなレベルの問いに答えようとした。

研究の成果発表としては、2008年1月4日から1月16日までは、インド・デリーでの国際学会およびジャワハルラール・ネルー大学の女性学研究センターのセミナーで発表し、インドおよび世界各国の研究者たちと意見交換をした。さらに、2008年1月19日から23日にアメリカ・サンフランシスコで開催されたアメリカ人類学会で発表し、アメリカ人類学会に所属する世界各国の人類学者と意見交換をした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① Akio Tanabe, Yumiko Tokita-Tanabe,
“Rethinking Network of Life:
Transformation of Biomoral Humansphere
in Orissa, India” アメリカ人類学会 2008
年11月21日サンフランシスコ
- ② Yumiko Tokita-Tanabe “Transcendental
Eros: Women and Spirituality in Rural
Orissa, India” World Congress on
Psychology and Spirituality 2008年1月
8日ニューデリー

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常田 夕美子 (TOKITA YUMIKO)
大阪大学・グローバルコラボレーションセ
ンター・特任助教
研究者番号：30452444

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者